学界動向

第六回先史学原史学国際会議

樋口隆康

ユネスコCIPS傘下の国際先史学原史学連合は、四年目ごとに国際会議を開いているが、その第六回会議が一九六二年八月二九日から九月三日まで、ローマで開かれた。筆者は日本学術会議から日本代表として派遣されたので、その模様を紹介しておく。

世界六〇余国の学者約千名が集ったが、地元イタリヤを筆頭に、ヨーロッパ各国出身が大部分をしめ、アジア地域からはインド三名、モンゴール二名、日本一名にすぎなかった。参加国として統制的に活動していたのはソ聯で、十六名の研究リポートをまとめ印刷して、参加者に配布していた。

イタリヤ政府もこの学界に大いに力をいれていた。カムピドリオ宮殿の大広間でおこなわれた開会式には、フアンフアニ首相が臨席して、祝辞をのべ、また、会期中に、ローマ法皇ヨハネス二三世も来場されて、言葉をたまわった。

会議は研究発表、特別集会、展覧会、レセプション、エクスカーションと、盛りたくさんあったが、そのうちの主要行事である研究発表は八つのセクションに分れた。

一、A、一般論、方法論、技術論
　B、先史学と自然科学との関係
　C、先史学、言語学、歴史学、民族学間の関係
二、旧石器時代と中石器時代
三、新石器時代
四、青銅器時代
五、A、鉄器時代　ハルシュタットとラテーヌ文化
　B、ローマ帝国と民族移動同時代の鉄器文化
　C、中世の北ヨーロッパ考古学
六、ヨーロッパ以外の諸大陸の先史学・原史学
七、先史人類学
八、先史・原史芸術の問題

その内容は、ヨーロッパに重点がおかれ、その他の諸地域は、アジア、アフリカ、アメリカを併せて、一つのセクションしか当てられていないのは、この学界の地域的比重差を示しているようでもあった。

報告は代表報告と一般報告に分れ、前者は著名な学者二五名が、それぞれのセクションを代表して行い（受持時間は質問を含めて一時間）、後者は二七〇名の大勢が三〇分づつ発表した。用語として

は、英・独・仏・伊・ソ・スペインの各語が自由に使われていた。

各セクションそれぞれに興味ある発表があった。B・コルチンのノヴゴロドにおける年輪法研究の成果、J・D・クラークの礫石器文化の新説、V・M・マッソンの中部アジアの新石器農耕文化の起源、R・J・ブレイドウッドの西アジアにおける最古の農村社会論、M・パロッティノのエトルスキ文化の編年論、A・P・オクラドニコフのシベリアにおける旧石器絵画の問題などは多くの参加者の関心を呼んでいた。

ここではそのすべてについて触れることができないので、次の二つを紹介しておこう。

J・D・クラーク「礫石器文化の問題」

現在、人類最古の文化とみなされている東アフリカの礫石器文化は、第一期カフ文化、第二期オルドヴァイ文化の編年がたてられ、前者は片面加工、後者は両面加工という技術面での相違があげられていた。しかもこの種の石器が最古の化石人類オーストラロピテクスと結びつくことも明らかにされている。

J・D・クラーク博士は、かねてからカフ型石器が人工品であることに疑をもっていたが、リーキー博士から、オルドヴェイ出土石器の調査を依頼され、その結果、片面加工と両面加工の差は用材の相違によって生じたもので、時代差ではないことを確認した。すなわち、薄手の礫を用材とした場合、鋭いエッヂをつくるのには片面加工が適し、厚手の礫石を材料とするときは、両面加工が施されるのである。

カフ文化はウガンダのカフ川、カゲラ川渓谷の一七五フィート段丘砂礫層より出土しているが、伴出のファウナは知られてなく、人工品としての確かな根拠はない。ただ剥離の打撃が一方向からのみ加えられていることが、オルドヴァイ文化にみられる両面加工よりも古いとされていた。このオルドヴェイ文化を出したオルドヴァイ遺跡の第一床は、ジンジャントロプス人骨をはじめ、多くの化石骨を出しており、北アフリカのヴィルラフランカ期（前期洪積世後半）にあたるとされている。

V・マッソンの「中央アジアの新石器農耕民」

ソ聯の中央アジア考古調査隊が十数年来調査をつづけているカスピ海の東方、トルコメニアにおけるジェイタン Jeitun 文化の発見を紹介している。イラン国境に近いアシュカバートの北北東三〇キロ、山川のつくった古いデルタ砂丘上にこの遺跡はある。早くパンペリーが調査したアナウの遺跡も近くにあるが、それよりも古く、世界最古の農耕文化といわれる西アジアのジャルモやジェリコと並ぶ時期のものだといわれている。

この文化の性格的特徴は、中石器文化的狩猟生活と、新石器的農

耕生活との新旧両要素が混在していることである。

出土の動物骨には、ヤギ・イヌなど少量の家畜がいるが、大部分は野生種で、その肉や皮を処理する為のフリント製細石器や骨角器が豊富である。また衣類にはオオカミやキツネの毛皮が使われ、織物をまだ持っていなかったことが、紡錘車の欠除によって知られる。

一方、コムギ、オオムギの栽培がはじまっている。住居の床面に印せられた籾痕、フリントの鎌歯とその骨柄、磨臼、磨棒などがそろっている。土器もすでにあった。繊維混入の胎土でつくった甕形、鉢形の土器には、波状文・爪形文を彩色で施している。土偶、チエス形円錐形品も、この文化の特徴の一つである。

定着的農耕を暗示する住居は、方形単室の家屋で、スサまじりの粘土塊（ピゼ）を積んで壁をつくり、室内の床は石灰を塗り、内壁面には竈や戸棚が付設してある。

この家屋構造からしられる当時の社会組織は、単婚家族からなる父権制のクラン組織であり、同地域のナマヅカⅡ文化以降にみられる多室家屋、共同台所を有する血縁的大家族制社会に先行するものである。

この文化の位置づけとして、マツソンは西アジア全域にしられる初期農耕文化を、北イラク（ジャルモ）、中央アジア西南部（ジエイタン）、シロ・シリシア（アムック）、パレスタイン（ジエリコ）の四地区にわけ、それらの形成は多元的で、別々の伝統をうけて、個別に農耕文化が成立したと主張している。

極東地域の研究発表はきわめて少なかった。日本に長く滞在していたJ・マリンガーが、南鮮から北九州にかけて分布する碁盤形支石墓を紹介したが、展示の資料は古く、その見解は外形を亀甲に比定して、天寿国曼陀羅の図文をあげて、中国の彼岸思想と結びつけるものであったが、単なる思いつき程度の域をでていない。

参加者自体、アジア地域に関する知識に乏しく、とくに極東地域の先史文化の中核をなす中国関係が皆無であったことは、汎世界的な国際会議として不思議なことであった。これは、欧米学者のこの方面への進出をまつまえに、東洋の研究者がその業績を広く紹介する方法を、もっと積極的に講ずべきであろう。

研究発表とは別個になされた特別集会においては、各国の協同活動を要請する種々の議題が論ぜられた。航空写真の利用、放射性炭素による年代測定法、熱残留磁気による法、スペクトル分析法、計量分析法、などの自然科学法の活用の問題が多くとりあげられたがそのほかでは、都市起源の研究、考古目録、辞典、年報の作製などについても、協同作業が呼びかけられていた。これらに対する協力は、われわれが世界の学界からおくれをとらないための必要条件であろう。

（京都大学助教授）